第 25 回日本インテリア学会大会(京都) 2013/10/28 記念講演

日本の住まいとインテリア -歴史的な視点から-

京都女子大学学長 川本重雄

私の専門は、平安時代の寝殿造の研究です。源氏物語絵巻『横笛の巻』の一場面では寝殿の北庇の境目が描かれ、奥に夕霧と奥さんが休む寝所が描かれています。40年近く寝殿造の研究をしていると、絵がどの場所を描いているか断定的に言えるようになりました。建築を見て文献資料を読み、寝殿造の研究を進めていくことで、日本の住まいの歴史の全体像がだんだん見えてくるようになりました。今日はそういった話をさせて頂きます。

1. 日本の住まいと風土

大抵の本では、徒然草の「家の造りやうは夏をむねとすべし 冬はいかなる所にも住まい、暑き比わろき住居はたとえがたきこと也」を引用し、日本の住まいは夏蒸し暑くて風通しを良くするために開放的になったという説明があります。今日は、これが間違っているという話から始めます。

日本の住まいが開放的だというのは真実です。したがって、日本の住まいは風通しがいいのも、真実になります。この命題の、みなさん逆のシーンだと思い込んでいるわけですが、逆は必ずしも真でないのは論理学の常識です。では具体的に夏涼しい家とはどういうものでしょうか。

ベトナムの高床の民家は、外観は非常に閉鎖的です。しかし、竹の床が透けて数cmの隙間がたくさんあって非常に風通しがよい。床下から来る風は一番涼しいですから、夏本来の過ごしやすい家です。日本の家とは明らかに異質です。

日本の民家の古いものを見ると、必ずしも開放的ではありません。古い民家は土壁で極めて閉鎖的な造りです。神戸市北区にある箱木千年屋は、現在二棟に分かれる形に復元され主屋は室町時代、離れの方は江戸時代中期の形で復元されています。この建物は、壁と窓と引き違いの戸を色分けすると良く分かるように、主屋と離れ座敷は極めて対照的で、主屋はほとんどの部屋が土壁もしくは板壁で囲われた部屋で構成されています。一応引き違いの戸がありますが、この戸を開けても裏側には小さな窓しかありませんから風通しが良いわけがなく、これは空間のつながりを強調するための戸だと考えた方がふさわしく、非常に閉鎖的な造りです。一方、江戸中期の離れ座敷はほとんど引き違いの戸で、戸を外して開放的にすることができ、床の間や押入れの奥に壁があるのに対して、窓は非常に象徴的な場所にしか使われていません。ですから、全く別の思想でできた家だと考えないとおかしい。私たちは離れ座敷の方をイメージして「この家は開放的だ」と言っているわけですが、これは歴史的なプロセスの中でできたもので、それを風土のせいだと言っても決して始まらないということを理解すべきだと思います。

開放的な方の日本の家を見たヨーロッパの人達は、日本の伝統的な住まいが西洋的な部

屋ではないと言うわけです。例えば、ブルーノ・タウトの『日本の家屋と生活』の中には、「部屋は直角に接している二方が外に向かってすっかり開け放たれているがこれが部屋と言えるだろうか」というようなことが書かれています。つまり、ヨーロッパの人達から見るととても部屋と呼べないようなものを、我々は部屋として認識しているのです。そこで、こういう家がどうしてできたかということを歴史的に解明していくことが、本来必要なのではないかと思いました。

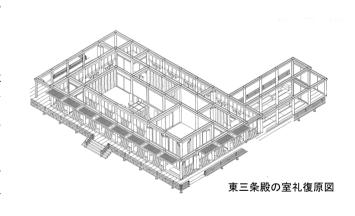
2. 寝殿造の成立と正月大饗

次に、寝殿造を少し見ていきたいと思います。ご覧の図は、奈良時代の藤原豊成のものと言われています。正倉院に、藤原豊成の屋敷の一棟を大津の石山寺に移築した時の記録が残っており、それを元に復元した案です。この部屋がどういう形で囲われているかといいますと、扉が正面3箇所、側面1箇所、それから窓が2箇所、あとは全て板壁です。ですから、非常に閉鎖的な空間だというのがわかると思います。奈良時代のお寺の僧房を見ても、窓とか扉とか壁できちっと囲われています。奈良時代の元興寺極楽坊禅室の復元図も、扉とか壁とか連子窓などで全部囲われています。

それに対して寝殿造はどうかというと、実は壁がほとんどありません。窓もほとんどありません。壁は少し残っているだけで、あとは窓や壁は一切ない。したがって、日本の家の作り方は、奈良時代と平安時代の境目に、壁や窓や扉で囲った閉鎖的なものから、そう

いうものを一切排除したものに劇的 に変化したということを考えなけれ ばいけないとわかるわけです。

図は、東三条殿の寝殿を北側から 見たところで、京女の学生さんに全 部書いてもらいました。先ほど横笛 の絵から北庇の場面だとわかるとい うお話をさせて頂いたのですが、こ れは当時の記録から復元したもので す。色々な所に寝室があるわけです が、奥にベッドがあって寝る場所と



座る場所がセットで一つの寝室となっています。母屋と庇の境には、本来段差があります。 実は、寝殿造は古代の建築でこういう段差ができるのは庇と孫庇、庇と広庇の境で、母屋 と庇の境には段差は生まれません。したがって、先ほどの絵は庇と孫庇の境目を描いてい るのだとわかります。このようなことも、色々な資料を読めばわかります。

1994年に1年間ロンドンに留学して煉瓦の家に住んでいました。日本の建築は平安時代を境に劇的に変化しますけども、西洋との違いを考え始めたきっかけがこの家です。レンズパークという所の四軒長屋の一番端の幅3mもない細長い家に住み、ここで煉瓦の家と日本の家の違いは何だろうかと考えていました。その時ふと思いついたことがあります。小

学校に行っていた子どもの送り迎えを親がしなければならないので、週に2日私が、残りの3日は女房が留守番をして送り迎えをしていました。少なくとも週に2日、この煉瓦の家に1日じっとして仕事をしながら、どこが違うのかを考え始めました。その時に思ったのは、空間の境界だとか囲い方が本質的に違っているということ。つまり、きっちり壁で囲って、部屋の大きさや家の大きさが変化しないのが煉瓦の家ですが、日本の家は襖や障子を外すと部屋が自由に大きくなったり、また分けたりでき、そこに本質的な違いがある。部屋の大きさの定まらない日本の家はどうしたら生まれるのかということを、同時に考え始めました。その時に思ったことは、壁があったらそんな家はできない。壁のない建築からしか、日本の寝殿造は生まれないに違いありません。では、壁のない建築は一体何が始まりかということを考えて、その時頭の中に浮かんだのが『年中行事絵巻』に描かれている大極殿でした。

大極殿は、建物の正面に一切建具がありません。それは、庭で儀式を行うために庭と一体になった空間を作り出すために、建物の中を一つの舞台にしているからです。ここに壁があったり扉があったりすると邪魔になりますから、そういったものが一切ない建築が出発点にないと寝殿造やその後の日本の住まいはできないに違いないと思いました。その後はそれを一つ一つ、資料を寄せ集めながら合理的な論理で組み上げていくのに何年もかけてきました。その時に色々考えたのですけども、一つはそういう建物はヨーロッパにもあるということです。

スライドはフィレンツェのシニョーリア広場の、美術館と美術館の横にあるロチェです。 イタリアの都市には必ずこのロチェという円柱の建物があって、広場や庭と一体になって います。一方、横の部分は窓と壁とが内外とをはっきり分けていて、こういう建築は日本 だけでなく世界中の人が作っています。ただ、開放的な部分に家を作ろうとしたのが日本 人で、これは日本だけの文化ではないかと考えているわけです。

こちらはフィレンツェのパラッツォ・ルチェライで、アルベルティが設計したコリント式のオーダーが三段に重なった、建築史の教科書に必ず出てくる建物です。この手前の空間、今はオフィスになっているのでガラス窓が入っておりますが、元はこのような所はなくて開放されていて、この空間を使って結婚式や儀式の時に使ったと説明がされています。こういう空間というのは色々な所にあったと思います。この二つの空間の違いをやはり認識しなければならない。

その時考えたのが「壁の空間」と「柱の空間」という言葉です。「壁の空間」というのは、壁によって内側と外側の空間を明確に分けるということを意味します。「柱の空間」は基本的に壁を作らない。横や後ろに作るのは良いけれども、外に開かれて外部空間と連続する空間を作ろうという考え方の空間です。この二つが人間の作る空間の中で、風通しとは関係なく、空間の連続性が本質的に違うという風に捉えるべきだと考えております。

日本の色々な建築を見てみますと、例えば伊勢神宮の内部昇殿は、板壁と扉で囲われた壁の閉鎖的な空間を持っています。一方、春日大社の御殿幣殿は、一つの建物で御殿と幣殿と両方使えるのですが、完全に「柱の空間」が二種類あります。また、竪穴住居の「壁の空間」だと、壁ではないですけど屋根で内外をきちっと分けていて、戸を入れば内です。

家型埴輪は、窓と出入り口の他は壁です。後ろ側に窓が二つありますけども、基本的に窓 と出入り口の扉と壁で隔てるというのが「壁の空間」の文化だと考えます。

アテネのアゴラにあるストアは、「柱の空間」で広場と繋がっています。そういう文化があって、このまさに「柱の空間」の中に住まいを作る、「柱の空間」を使って住まいを作るというのが、日本の平安時代以降の新しい住まいの歴史の転換になったという風に考えたわけです。

春日大社の着灯殿は、春日大社の本殿の手前の方にある建物で、コの字型に土壁が巡って南側が完全に開放された建物です。この建物をどうやって使うのか見たくて3年春日大社に通いました。一年に一回しかお祀りがなく、その時に着灯の儀というのがあります。最初の年は遠くからしか見ることができず、何をしているか見えませんでした。2年目は昭和天皇の皇后が亡くなられた年にあたり見せてもらえず、3年後にようやく中を見せて頂いて写真を撮りました。着灯の儀は、勅使が座って式次第を確認して、その後本殿の方に移って儀式を行います。まさに式次第を確認するためだけの建物です。

なぜこの建物に注目したかといいますと、平安時代に、春日大社にお参りした時にこの 建物を御座所として利用したという記録があります。藤原頼長の事例を、彼の『台記』別 記の記録を元に学生に復元してもらいました。板敷を設けたり板を入れたりして寝所と境 目を作って、お供に来た人達と一緒に宴会する場所です。今の建物からは想像つかないで すけども、平安時代の人たちは自由自在に寝室を作ったり宴会場を作ったりできたという 証拠です。他に藤原道長の時代、一条天皇の御所としたという記録が、着灯殿を利用した 一番古いものです。11 世紀、柱だけの空間で住まいを作るという作り方が、平安時代中頃 には完璧に出来上がっていたということを示しています。

一方で一つ問題があります。絵を描く人が建物の中を見せるために扉を省略したのだという意見が出てきました。それは中国建築史の大家の田中淡先生で、近年亡くなられました。中国には必ず扉があるのだから中を見せるためにやったのではないかとおっしゃられました。それで、こういう見方もあるのかも知れないと以後気をつけておりました。

そんな時、福岡で建築学会があって太宰府の九州歴史博物館に行きました。今はもう無いですが太宰府の模型が展示してあり、まさに私が探していた建築で、早速見学して来ました。あいにく学芸員の方が出張でしたが、太宰府市史に沢村先生の文章があり、図とともに何故ここに扉や壁や窓がないかという理由が書いてありました。礎石に自福座と横に扉や壁など中に入るときに横材を受けるために、横に少し出っ張りを作ります。これは側面と背面には残っていますが、他には一切ありません。したがって、ここには建具も窓も何もなかったということが書いてあり、感動致しました。この事例は平安時代の建物ですけども、日本の宮殿や太宰府のような所には、正面に柱しかなくて窓や壁もない建物が実際にあることがわかります。一方で、それが寝殿造に取り入れられたということを、どう説明するのかが次の課題になります。

もう一つ、少し確認しておきたいことがあります。奈良時代の貴族の家は、発掘調査か

らわかっている事例がたくさん残っていて、柱の並び方や建物の建ち方の関係がわかります。そこから、寝殿造との大きな違いとして、寝殿や東の対、西の対というような正殿、脇殿という関係がまだ見られないということがわかります。それから、寝殿造ですと建物と建物を繋ぐ渡殿や対から南に伸びる中門廊など、南の庭を囲ったりするものがありますが、奈良時代の建築にはまだない。ですから、寝殿造と奈良時代の住宅を比べると内部空間が劇的に変化するだけでなく、建物配置も全然違うわけです。では、こういうものは何から来たのかということです。

少しややこしい話になるのですが、複廊という幅二間の廊、一方、単廊といって幅一間の廊があり、複廊単廊、単廊単廊という結び方をします。実は平城宮内裏では、東西に複廊、南北は単廊が通っております。複廊が正殿と付いて、新たに単廊が生まれます。実は単廊もあったのですが、弓の儀式をするのに邪魔なのでのちのちに壊してしまいました。そうするとこの単廊は繋がってしまうわけですからこれがこの建物と一緒になってきます。お寺でも東大寺大仏殿など、段々と金堂などと繋がっていくわけです。そういった変化が宮殿においても同様に起こっているのですが、先程見た形はまさに天皇の住んでいた内裏の造り方と一緒です。さらに正殿脇殿といったような形も共通しています。つまり、建物配置から見る限りはこういう宮殿建築を真似しない限り、できてこないのです。それから、開放的な空間も同じように宮殿や役所の建築を模倣しないとできてこない。だから、寝殿造は極端に言うと、宮殿を真似て造ったというのが結論的なものになってきます。紫宸殿のような「柱の空間」の庭を囲うような回路で作られた空間、それをモデルにして作られたとしか考えられない。

なぜ宮殿建築を模倣したのかが次の課題です。実は宮殿建築では宴会をするのです。宮 殿建築で宴会をする時は基本的に舞楽院という建物が宴会場です。宴会は最近ずっと研究 しているテーマなのですが、中国や韓国やベトナムと比べてどう違うかということを各研 究者と共同研究しています。舞楽院は、全ての役人が集まって宴会できる大宴会場です。 これはのちまで大宴会場として使われるのですが、少し人数が少ないと内裏で行われます。 内裏は天皇の住んでいる宮殿ですので、身分の低い人は中に入れません。大体、五位、従 五位下よりも上でないと基本的には中に入ってお酒を飲んだり色々なことができません。 宴会の歴史を年代を追って調べていきますと、この舞楽院ならば誰でもお酒が飲めるので すが、宴会が宮殿で行うようになるってからは、六位より下の人は正月に挨拶に行っても お酒ももらえない状態になります。非常にまずいのでなんとかしないといけません。代わ りを何か作ろうということになったと思うのですが、このあたりは想像の域を出ませんが、 これが正月大饗という宴会です。この宴会は正月に太政官の長である大臣が太政官の役人 をみんな招いて酒を振舞うという宴会です。そこには天皇の使いがやって来て、いろいろ デザートを持ってきます。それから、親王が酒を勧める乾杯の係をします。それから、こ のテントで宮中坂目所がお燗をしてお酒を準備します。お酒も五献目といって 5 杯目まで はここで準備するのですが、この後は大臣の家で準備しないといけません。

絵に出てきているのは犬を連れている犬飼さんで、こっちが鷹飼さんです。鷹が小鳥を

捕まえて、食べる前に犬が走っていって食べるなよということやるのです。この二人がやって来て枝に小鳥を挿して、焼き鳥にしてみんなで食べるというセッティングなのです。この二人も基本的には宮中の役人です。880年がこの正月大饗を確認できる最初の事例ですが、もう少し前からあったはずです。すると先程の年代とほぼ一致します。極めてパブリックな宴会を大臣の屋敷でやることによって、宮中の宴会で落ち溢れていた六位以下の人達もお酒を飲めるようにしたのです。

舞楽院は万客がお酒を飲めるのですが、内裏は天皇の住んでいる場所ですので五位より上の人しか入れません。舞楽院の宴会は 9 世紀の中頃以降はやらなくなり、宮中の宴会を補完する役目をもつ大臣の家は、宮中の宴会に対応できる空間にしなければなりません。宮中の宴会に対応できるように、宮殿をモデルとして寝殿造が造られたという風に考えられます。ちなみに、この部分は歴史学の方もほとんど私と同じ意見で、時期的には私より早くに本に書いておられ、同じように考えていらっしゃいました。

これは学生に書いてもらった寝殿造の図ですが、屋根のかかっていない部分が正月大饗で使われている場所で、屋根のかかっている場所は使われませんでした。テントをはり、屋敷のほぼ 2/3 ほど使われている様子がわかるかと思います。まさに正月大饗をするために寝殿造という特別な家を作らなければならなくなったということを示しています。

さて、今度は寝殿造が普及していくプロセスを考えなければなりません。こんなことを 申すのは、今の話は大臣の家なのです。大臣の家は正月大興をしないといけないため「柱 の空間」の家を作らないといけません。しかし、この正月大饗をやらなくてはならないの は大臣だけです。寝殿造が、大臣以外の人達の家に広まっていくのはどういうことかと考 えなくてはいけません。このことを真剣に悩むようになったのは、本当に最近になってか らです。上の方の家が下の方の家に段々と伝わっていったのかと最初は思っていたのです が、それではいけないと思い始めたのが 2008 年です。

寝殿造がどういう風に普及していくかを、建具の発明、特に遣り戸の発明と普及で、次に考えたいと思います。こういう「柱の空間」に家具や調度で仕切りを入れて空間を分けていたわけですけども、その中で仮設的な建具が次第に成立していくようになっていきます

紫宸殿の賢聖障子は回転式の扉で、これで出入りできるようになっています。それぞれ 3 箇所あって、天皇が出入りするところ、ここは東宮が着替えをするために使われるところです。この賢聖障子は、古い時代に片付けておいたという記録が残っています。そして、 儀式の時だけここにはめ込んだという記録が残っています。 平安時代の終わりには、ずっとはめ込んでいたと書かれています。こういうもので、空間を仕切って使うということが 9 世紀頃から出ています。東三条殿も、塗篭のところ以外の押障子 2 枚は外します。

もう一つ大きな変化として出てくるのは引き違いの建具です。当時の言葉では遣り戸ですけども、今のところ 10 世紀末の落窪物語に遣り戸という言葉が頻繁に出てきますが、それより前は確認できていません。したがって、10 世紀末には、我々が襖と読んでいるものができたのがわかります。鴨居が特徴的です。寝殿造というのは大宴会場用に作った建築

ですから大ぶりです。大空間だから襖を上まで作ってしまうと、がたがたして開け閉めの 具合が悪い。そのために、一段低く鴨居を設けて鳥居障子の形にしないと開け閉めが大変 だということですね。こんな事からも寝殿造が今の我々の住まいのスケールよりも大きい という事が容易にイメージできると思います。ちょっと話が脱線しましたけども。

3. 遣戸の成立と寝殿造の普及

2008 年は「源氏物語千年紀」という年で、紫式部が源氏物語を書いて 1000 年経ったと いう年で、色んな所で記念行事がありました。私は寝殿造が専門ですから、色んなところ に呼ばれて寝殿造の話をすることになりました。その中の一つ、中古文学会という源氏物 語を専門にしている人たちの学会で話をしてくれと言われました。源氏物語を実は読んだ 事がなくて、どうしようかと思ったのですけども、ちょうど一年ほど前に依頼がありまし たので、順々に源氏物語を読んでいこうと思いました。学生は『あさひゆめみし』という 漫画本を貸してくれたのですが、読んでもピンとこない。これはいかんと思い読み始め、 夏休み中かかって対訳のある本も手元に、一通り読みました。読んで気づいたことは、中 古文学会の記念大会の時にもお話しさせていただいた内容の一つですけれども、光源氏が 女性のもとに忍び込んで行く様子に二通りある事です。例えば、この空蝉の所へ行って契 るわけですけれども、空蝉の所に行く時は皆が寝静まったので鍵かねを試みに開けてみた ら向こうからは掛かってなかった。すっと障子を開けて中に入って行くと几帳が立ててあ った。つまり襖障子をすっと開けてこの空蝉の所へ行ったわけです。一方、藤壺の時の描 写には障子は出でこない。代わりに布を開けたりして女性の所に入って行くわけですね。 空蝉は国司階級の中級貴族で、そこでは女性は襖の奥に寝ているわけです。ところが三条 宮のような大臣の家にいる様な女性、つまり主人の様な女性は、そんな障子の向こうに寝 ていない。御帳とか帷子とかそういう布の奥に寝ている。それを見事に源氏物語は書き分 けている。ですから、中級や下級貴族たちはもう障子で仕切って部屋を作っているわけで すが、やんごとない大臣の家は布で囲って女性の場所を作っている。襖とか障子、遣り戸 は身分によって普及の仕方が違うという事が、源氏物語を読んで初めて分かりました。

また、二条院という源氏も住んでいた大臣の屋敷で、浮舟のいる場所があります。浮舟のように大臣の家でも、奥の方に住んでいる女性を見ようと思うと障子の向こうにしか見えない。ですから、大臣の家だと表の方には障子は使ってなくて、裏の方に使っている。一方、中級や下級の貴族、あるいは八の宮の宇治の屋敷はほとんど障子で仕切って部屋が作られている。そういう違いがあって、襖障子を使って部屋を作るシステムが中級下級の貴族に急速に広まっていったということ、それを源氏物語の記述から気付きました。

つまり、大臣の様な屋敷は、御帳とか几帳とか御簾とかで仕切られた空間によって女性の寝所や色んなものが作られている。ただし、奥の方には障子がある。ところが国司の家や八の宮の宇治の屋敷の家のように、大臣の家よりランクが下がる家は、むしろ積極的に障子で仕切られた家になっていた。それを源氏物語という物語、あるいは紫式部が源氏物語において意識的に掲げていたという事が、物語を読んで分かった。ですから住まい、寝殿造と言っても2タイプあって、大臣の家の大宴会場の様な寝殿造と襖や遣り戸で仕切っ

4. 寝殿造から書院造へ

次に、襖や障子で仕切った家はどういうものかということですが、平安時代中頃の文献 のチェックはまだできていないので、図面を見ながら考えて行きたいと思います。

これは平安時代の末の平清盛の屋敷の六原泉堂の平面図で、安徳天皇を出産する時の指図です。これを見ますと大きな違いがでてくるのが、母屋部分の作り方です。二間の梁間に柱が立ってなかったのが、六原泉堂は柱が立っている。実は、考古学の人はこれに気付いて、全国でこういう建物が出てきています。京都周辺で11世紀ぐらいから、地方ではもう少し後から、沢山出てきます。ある時代を境目に柱が立つ建物が日本中で出現しているので、実際にそれを発掘している方に集まってもらってシンポジウムをしたことがあります。大きな変化を外的要因として皆さん考えておられるけれど、これは襖で仕切る家の始まりの形ではないかとその席で話させて頂きました。

記録から扉が並んでいたことがわかりますが、「御帳の寸法かなわず」とあり、狭くてここに御帳が立てられない、どうしようかという事で、結局寸法を縮めて作った。あるいは、立太子の時に寝殿に御帳を立てられないので結局こちらの方に立てることにしたという記録です。御帳とはベッドですがそれが立てられない家が普通なってきて、結局襖で仕切ることになりました。

これは大饗をした時の図面です。平清盛の一番の屋敷ですので、ここでやるしかない。 ところが公卿の座などがルール通り作れず、「後代の例になすべからずや」と先例通りじゃないから後の参考にしてはいけないと書いてある。まさにそういう先例を無視した形でしか色んな事ができない家です。大臣大饗のイメージを持ってなければ、色んな差しさわりがでてくるわけですけども、そういう家が沢山あったわけです。

もう一度、寝殿造の住み方について確認したいと思います。寝殿造の永久3年の引っ越 しの図面ですが、ここに三か所の居室がつくられています。この時代の人は南枕で寝まし て、御帳のある寝室には座る場所が西側と南側で二か所作られている。二か所の理由もき っとあるはずですけども、まだ誰もよく理解できていません。北側の場所に畳が二枚敷い てあり、ここが寝る場所になります。こういう風に見ていくと、実は生活する場所、寝る 場所はそんなに広くなくていいということが分かります。この場所がどういう風に絵巻で 表現されているか載せていますけれども、ここに女三宮が座って、ここにお父さんの朱雀 とお婿さんの光源氏がいて、不義の子ができてどうしようかと相談している場面です。浜 床が見えますので御帳だとわかります。

これは柏木の所に見舞いに行ったところです、子供ができてどうしようかと悩んでいる わけです。ちょうど先ほどと同じ部分で、孫庇から描いています。後からその理由もお話 したいと思いますが、これは奈良時代的な空間だと想像しています。そういう風に考える と一間の幅の空間に寝室とか座る場所とかが作れる。

奈良時代の結婚式の時の室礼の記録を元にその部屋の室礼を復元した図ですが、座る場所と寝る場所がこの中に全部収まる一つの場所がある。これでこの横つながりでできてい

ると思うのですが、いずれにしても障子で仕切られ御帳台を置かないような家は、こういう形で部屋を作って済ませていた。まだ整理できてないですが、そのように考えるといいかと思います。

一つ言っておきたいのは、奈良時代には部屋という概念があった。この時代に日本にも しヨーロッパの人が来たら日本にも部屋があるという風に思ったでしょう。ところが次の 段階になるともうない。部屋という概念では塗籠がありますけれども、そのうち無くなる ので気にしなくていいと思います。部屋という考え方がいったん無くなった。柱の間に仮 設的に囲って部屋を作る。

要するに、部屋が壁や窓や扉で囲われた空間だという考え方から、いわゆる襖とか障子とか建具で囲われた空間へと変わっていくわけですけども、襖や障子のような引き違いの建具で囲われた部屋とうい概念がどういう風にして出来上がっていくかを、四つの段階で示しました。第一段階は、大空間を屏風とか布とか御帳のような物で仕切ったり、区画して住む場所を作る。第二段階は、襖障子を入れて境目を区画する。三つ目の段階は、2間×2間や3間×3間という部屋ができて襖で仕切る。一間ごとに柱を立てて、その周りを建具などで囲って部屋を作る。日本の新しい部屋が登場する。そして四つ目の段階が四枚襖を使う。これを外すと部屋と部屋が繋がるということです。ですから続き間をイメージして、間の柱を抜く段階。こういう風に引き違いの建具を使うことによって、日本の部屋の概念は少しずつ寝殿造から段々と書院造的なものになっていく。

従来、書院造というと、床の間がいつできたかとか、違い棚がいつできたかということを大田博太郎先生以降ずっとやっているけれども、一番肝心なことは、寝殿造で全く違う概念に生まれ変わった空間概念がどういう風にして変わっていくか、そこが一番大事で、それらは付けたしではないのかと思っています。ですから空間のあり方作り方とかつながり方とかがどういう風に変わっていくかという観点から書院造の成立を見なくてはいけないのでないかと考えています。

5. 民家の成立

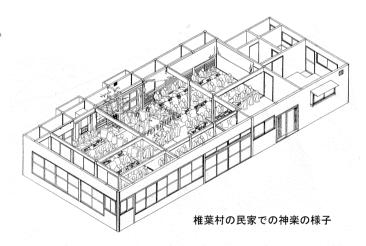
次は宮崎県の椎葉村の民家調査からです。

日本の住まいの成立には儀式が非常に大きなファクターを占めていたという風に思い、 民家と儀式の関係を色んなところで調べたいと考え、2000年頃から全国各地で古い伝統的 なお祭りを調べています。本当は冠婚葬祭すべて調べるといいのですけども、日にちが決 まっているのがお祭りだけですので、民家でお祭りをしているところを、学生と一緒にい くつか調査させて頂きました。その中の一つが宮崎県の椎葉村というところの尾手納(お てのう)という集落です。椎葉村では神楽がずっと継承されていて、1年に1回、村のど こかで椎葉神楽が演じられています。多くは神社の神楽殿や公民館で開かれているのです が、約10年前に調査しましたら5-6箇所で民家を使ってまだやっていました。民家のもの はこの際全部見ようと3年かけて全部見ました。尾手納は、特に山の奥深い所で伝統的な ものがよく残っていると、地元の役場の方から伺って調査に行きました。 Dさんの御宅は、2002年の夏休みに実測調査をさせて頂いて、まず図面をつくりました。 次に11月の最終週に、神楽の様子を写真やビデオに撮って、図に復元しました。夏休みの時には布団が積まれ、襖や障子や、子供の勉強机など色んなものがあったのですけれど、椎葉神楽の当日の昼に学生と行った時には、それらは一切片付けてありました。学生の1人がそこにいたおばあちゃんに「布団や襖はどうしたの?」と尋ねたら、「おもての田んぼ」とぼそっと答えたのが印象的で、今でも良く覚えています。実は、おもての田んぼに青いビニールシートが敷かれ、そこに全部出していました。当日は強い雨でしたので、上からも青いビニール袋が被せてありました。家の中のものを運び出してがらんとした空間を作って、お祭りの準備が12時から始まりました。

どうせなら運び出すところから見たいと思い、翌年は前日早朝から行き、運び出すところから全て見学させて頂きました。その時は別の御宅ですけども、襖とか箪笥を運び出すのはすべて近所の人です。この家の人は一切口を出してはいけなくて、仕事に行き、近所の人が皆で運び出して場所を作って始めました。大体 200 人位が入れる空間で、実際に百数十人の人が集まって徹夜で神楽が演じられました。

翌年は近所にある築十数年のお宅ですので、全く椎葉神楽用には出来てなくて、扉が付

いていたりするのですけども、扉の丁番を外して開放していました。よく見ると丁番のネジの穴が両方の柱に付いているものですから、どちらが吊りもとかを聞いたのですが、お葬式とか色んな時に外して、どちらかわからないと言われました。全部扉は外されました。全部扉は外されましたのでおきましたのでおからなど色んなところを見せてもらって学生に絵に



てもらいました。あえて学生に書いてもらう理由は、ビデオに撮るよりも絵にして見れば一目でわかるからです。こういうのは建築の学生しか出来ないから、学生にはっぱをかけて作ってもらいました。ものがない時代から続いている儀式なので、地元で取れる竹とか和紙、そういったものだけで神楽で使う道具や舞台を作っていきます。この家は流石にちょっと狭くて、駆け出しというのを大工さんに作ってもらって、何とかみんなが入れるようにしていました。これを建てるのにいくら掛かかったのかは忘れましたけども、ご祝儀で畳を替える等のことも含めて賄えるというお話でした。

日本の民家では襖を使うことによって、普段の生活と冠婚葬祭のような儀式のために必要となる大空間を、時間差で実現できる非常に素晴らしいシステムを作り上げた。襖とか障子とか、実は冠婚葬祭のために取り入れたのではないか。だから別に、偉いお侍さんの家がそうだから生れたというのではなくて、むしろ引き違い扉を導入する必要性が民家にもあったのだと私は考えました。

ここまでお話したように、10世紀の寝殿造ができた時点、既に非常に特異な建築だったのですけれども、そこで発明された遣り戸という二本レールの上を互い違いに滑らせて開け閉めでき、場合によっては外せる、という建具を使って非常に珍しい家を工夫して作り続け、その結果、民家や書院造ができていったというのが、今の私の考え方です。

6. 日本の室内空間

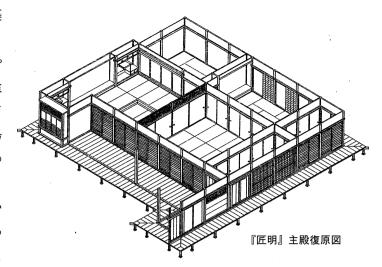
最後に、インテリアの観点に立って、室内空間についてお話ししたいと思います。正倉院に伝わるという屏風があります。百帖あまりの屏風が正倉院に寄付された記録が残っており、その屏風を復元して CG で宮殿の中に並べた様子を再現させるというプロジェクトがNHKであり、私の所へ依頼が参りました。そんなの分かるわけないと思いましたけども、頼まれた以上やらないといけないと思い、まず百帖屏風の資料の整理から始めました。

やればやはり分かることがあります。何が分かったかと言いますと、百帖屛風というの は同じ屏風が 100 ある訳ではなく、かなり性格の違う屏風が幾つも組み合わさって 100 帖 になっているということです。NHKが大道具さんに頼んで実物を作りました。それを立 てようと、この大学のキャンパスで学生と一緒に並べてみました。何を意味するのか考え ながらやってみると、分かることがあるのですね。高さを見ると、ちょっと高い五尺を超 える屏風には絵が描いてあり、数が多くても2帖2枚のセット、場合によっては単体です。 ずっと低い屏風だと夾纈(きょうけち)屏風や蝋纈(ろうけち)屏風、つまり染色の屏風 になり、一気にセットの数が増え、寸法も大体揃ってくる。高さ5尺で、幅は全部一緒で す。当然、屏風の使い方も違います。結局その時考えたことは、この夾纈屏風や蝋纈屛風 のような沢山のセットの屏風は、まだ「壁の空間」の建築ですから、部屋の周りの壁の前 に立てて巡らせる。この高さ5尺の12帖セットとか7帖セットの屏風を、天皇なら天皇が 座る場所の背景に立てる。天皇ですと段の高い所に座るようなセットもありますので、そ れに合わせてより高い屏風が必要となる。100の中には、まさに座の背景となるような絵を 描いた綺麗な屏風と部屋の周りを囲うような染色の屏風があるという風に考えると、一番 すっきりする事に気付きました。同時にこの時思いついたのは、『類聚雑要抄』の引っ越し 時の室礼の2図のうちの一つです。四面に壁代をかけ巡らせて、その前に屏風をぐるっと 巡らせる、まさにそれだと思いました。つまり本来「壁の空間」の壁があり、その前に屏 風を巡らせて一つの空間を作り出すというイメージが、百帖屏風の組合せの中から見えて くる。ですからこれはまさに奈良時代の空間の作り方、つまり壁の周りに屛風を巡らせて、 その中に家具や調度を並べて寝室や生活空間を作り、その一部にちょっと絵の描いた屏風 を交えるというあり方が実はあって、壁代などが出てくる。これは、奈良時代の「壁の空 間」の装束を継承しているのではないかと思いました。これに対して、寝殿造にしかない 室礼の仕方、その後一つの規範になってこの空間を元に総柱の建物ができていく。そうい う風に考えると非常に分かりやすく理解できると思いました。

終わりに

最後のアイソメ図は、学生が卒論で書いてくれた図で、『匠明』の記録内容に忠実に書い

た貴重な図です。当時、建築の中でどういったことが起こったかということ、要は襖や引き違いの戸で囲われた部屋が基本的な単位として出来、場合によっては襖を開ければつながると同時に家具をビルトインとも、こうした建築であったが故に可能になった。ま



さに、それまであった家具の多くは、それこそ書院造の…テーブルのようになりましたとか、違い棚は棚から生まれましたとか、出文机が出来ましたとか…まさに家具がどんどん柱と柱の間に埋め込まれることで、ほとんど家具の無い空間という形で部屋が出来上がっていく。それが書院造の完成系と言っていい姿である。だから日本の建築が柱の空間であったが故に、そのインテリアの家具の要素がどんどんビルトインされていくし、襖もそうした仕切りための家具や障屏具のようなものだったと思いますが、それが建築化されることによって日本の書院造が出来上がっていく。実は今日お話しした内容の論文の原型みたいなものを、山川出版から出すために十数年前に書きました。家具史の小泉和子さんがその原稿を読んで「日本に家具がない歴史が分かった」と言われました。一向に出版に至りませんでしたが、いよいよ原稿が揃ったので出すということです。去年の暮、多少書き直して、間もなく出版されることだと思います。

今日は日本の住まいと、最後に室内のあり方の変化というようなお話をさせて頂きました。本日は最後までご清聴頂きまして本当にありがとうございました。

(文責:片山勢津子)